

7月

令和6年7月1日

ちびっこの森通信 vol.86

☆☆今月のテーマ☆☆

- ・健康に留意し、夏を元気に過ごせるようにする。
- ・七夕会など季節の行事や活動に楽しんで参加する。

～今月の園内学習～

- ・足し算…3の段
- ・掛け算…3の段
- ・歴史カード…「徳川慶喜」ほか
- ・国旗カード…アフリカ地方
- ・絵画カード…「ゴッホの部屋」ほか
- ・地理カード…近畿地方
- ・声に出して読みたい日本語
- …「走れメロス」太宰治ほか

～保育のポイント～

人間には、(三次元的で肉体的な)左脳と(高次的で精神的な)右脳があります。これまでの教育は主に左脳に偏重した価値観で例えば、(1)親が子どもを見る基準を設けたり、(2)他の子と比較して我が子を見がちであるためにどちらかと言えば競争や対立を生み出しやすい傾向に陥りがちです。これに対して右脳教育は、心を育てることを大切に、人への愛と一体感を重く見ることに重きを置いています。子どもをリラックスさせる、心の子育てをする6つの事項を取り入れることにより親子がリラックスして毎日が過ごせるポイントをご紹介します。①子どもの短所を見ない。長所を見つけて褒める。②今の姿を出来上がった姿と見ない。これからますますよくなると思う。③完全主義で育てない。不完全でいい、今できなくてもいい、と思う。④比較しない。わが子はわが子の個性で伸びていると思う。⑤学力中心で育てない。どんな成績を取ってきても、努力を認め、褒める。⑥そのまま100点と見る。マイナスの評価をせず、子どもの今の姿をそのまま受け入れる。今までの親が子をマイナスに見、マイナスの言葉をかけている間は開けなかった子どもの心が開けることにつながります。その結果、子どもの性格が穏やかで、人に優しくなるばかりか、能力まで変わってきます。今まで理解力、吸収力、記憶力が悪いと思っていた子が右脳が開けイメージによる記憶や計算力といった分野で能力が発揮され、にわかに吸収力のよい賢い子に変身することに繋がるのです。このことは大脳生理学者で右脳研究で著名な品川嘉也先生の左脳と右脳の学習量の比率は1対100万だと言われていることから理解できます。しかも、この右脳が優位に働きやすい時期が0～6歳までで、それを過ぎると使いにくくなることから右脳教育の重要性をご紹介させていただく次第です。～「右脳教育」で子どもは変わる (七田真著)より抜粋～

♪今月の歌♪

- ◇たなばたさま
- ◆かもめの水兵さん
- ◇アイスクリームのうた

～行事予定～

- ・水遊び開始…1日～
- ・英語教室…2日(幼児)
- 5日(乳児)
- ・七夕会…4日
- ・書道教室…4・11・18・25日
- ・体操教室…8日(2/4・5歳児)
- 10日(0・1/3歳児)
- ・身体測定…18日(幼児)
- 19日(乳児)
- ・音楽教室(ギター)…22日
- ・リミック教室…23日(乳児)
- 24日(幼児)
- ・誕生日会…26日
- ・避難訓練…29日

「ひよこ」と「りす」組だより

入園から間もない日々は不安で落ち着かない時もありましたが集団生活につきものの季節の感染症に悩まされること以外、今では園生活にもすっかり馴染んで普段着で過ごせているのは何よりと感じています。ひよこ組は登園後、先生に愛着からくる笑顔でのまなざし光線を送ってくれてくれるようになってきてくれているのにも思わず嬉しさがこみ上げてきます。一方、りす組の子たちの中には「自我確立」過程にあるようで“イヤイヤ言動”が目立つようになってきました。「トイレ」といっても素直には応じてくれないこともしばしばで、そんな時は無理強いすることなく(後で来てね、などと)「間」を置いて一旦は受入れ、気分転換が図られるようにしています。これからもいろんなことあると思いますが、一人ひとりの発達状況や性格などを考慮した対応を図っていきます。暑い夏には水に慣れ、水遊びで涼を取って、元気に過ごしていけるようにしていきたいと思っています。

「きりん」と「こあら」組だより

最近では春と秋が極端に短いことから四季から二季と言われ、梅雨の風情もどこへやらで真夏日和でヘトヘトとなりがちですが、こどもたちは暑さにめげず動き回り汗ばお中でも元気一杯。きりん組というと最近、語彙がとみに増してきてお友だち同士との間で会話が活発に交わされるようになってきて、以前のような実力行使一点張りからの変化が見られるのが素晴らしいと感じています。こあら組はごっこ遊びなどお友だちとの交流の中で自分の気づいたことや思いを伝えたり、逆にお友だちの思いを受け止めたりと双方向のコミュニケーションで会話が弾んでいるのが素晴らしいと感じています。今は排泄をはじめ、身の回りのことを自分でするように1つひとつ習慣化できるように取り組んでいます。このところの真夏日和続きで「プールは？」と水遊びを心待ちにしているようなので水遊びで元気に夏を乗り越えていきたいと思っています。

「ひつじ」と「ぞう」組だより

最近では季節の巡り合わせが暦通りにならないばかりか、度を超えた季節の到来で戸惑うことが多くなってきましたが、こどもたちはものともせず元気印で過ごしています。ひつじ組はお芋の蔓植えの時期を前に農場のおじいちゃんのじゃが芋掘りのお誘いを受け、大小様々な豊作の収穫という貴重な体験をする機会がありました。みんなはおかげで旬の新じゃがで煮た肉じゃがに舌鼓を打ち、パワーチャージをしました。ぞう組は園ではカゴメさん提供のトマト苗の栽培に取り組中で日々の水やりの中、茎の成長、開花に実がつくといった食農活動に取り組中です。農場の作物同様に自分たちでお世話をしたトマトを収穫し、実食というサイクルを実感してもらえるといいなあ～と思います。他には、公園では最近、ジャングルジムがお気に入り天辺まで登ったり、年下の子との交流では玩具などをそれとなく貸してくれたちと気づかいのできる年長者として頑張っている姿が印象的となっています。

給食だより ～脳の発達に欠かせない味覚教育～

人の味覚は生理学的に、甘味・酸味・塩味・苦味・うま味の5種類で一般的に五味または基本味と呼ばれています。人は食べ物を口にし、舌の表面にある味蕾(みらい)という器官を経、狭義的には味を感じ取るのが一般的。世界のミクニ”さんが「味覚の発達には12歳がピーク」の中で味覚と脳の発達との関連性に触れられていて、(ファストフードの急激な台頭で家庭料理がおざなりになる現状を何とかしたいという思いで)味覚を育むことは子どもたちの脳の発達や五感を磨くことに繋がることから重要との言及から幼少期の育みのアプローチの一つとして「味覚教育」をご紹介します。味蕾は食べ物に含まれる五味をキャッチし、神経細胞を通じて「甘い」や「酸っぱい」と知覚する機能を有しています。それ以外にも目で見る視覚、香りかぐ嗅覚、焼き立てパンを触って感じる触覚に食べている音などで感じる聴覚からも美味しさを感じることができるところから味覚は五感を使って食べ物を味わうことが大切と言えます。味蕾は8歳から急速に増え、12歳をピークに減少。ピーク時は約1万2000個なのが大大人になると半減してしまふ。味蕾自体はいろんな食べ物を食して経験値を積まないとい使ものにならないそう。これは小脳が8歳頃、大脳は12歳ごろに完成すると言われていて、人は8歳頃から急激に、物事への気づきがはじまります。その頃までにとどのくらいたくさんの刺激を与えたかによって五感の働きによって脳の発達が促され、味蕾が味をキャッチする度に送られる信号も、脳の刺激となるのだそうです。その五感を駆使することで「味」だけでなく、周囲や相手をよく観察できるようになって自然と想像力も働くようになり、気づきが育まれるので単に味覚を育むだけに止まらず、人間性向上にも効果があるということなので味覚教育を紹介させていただいた次第です。